

にんげん
坪井直
Never give up!



「聞け！ヒバクシャ（被爆者・Hibakusha）の声を！/ Never Give Up!」. 1

編集：盈進中学高等学校（広島県福山市）ヒューマンライツ部（Human Rights Club）

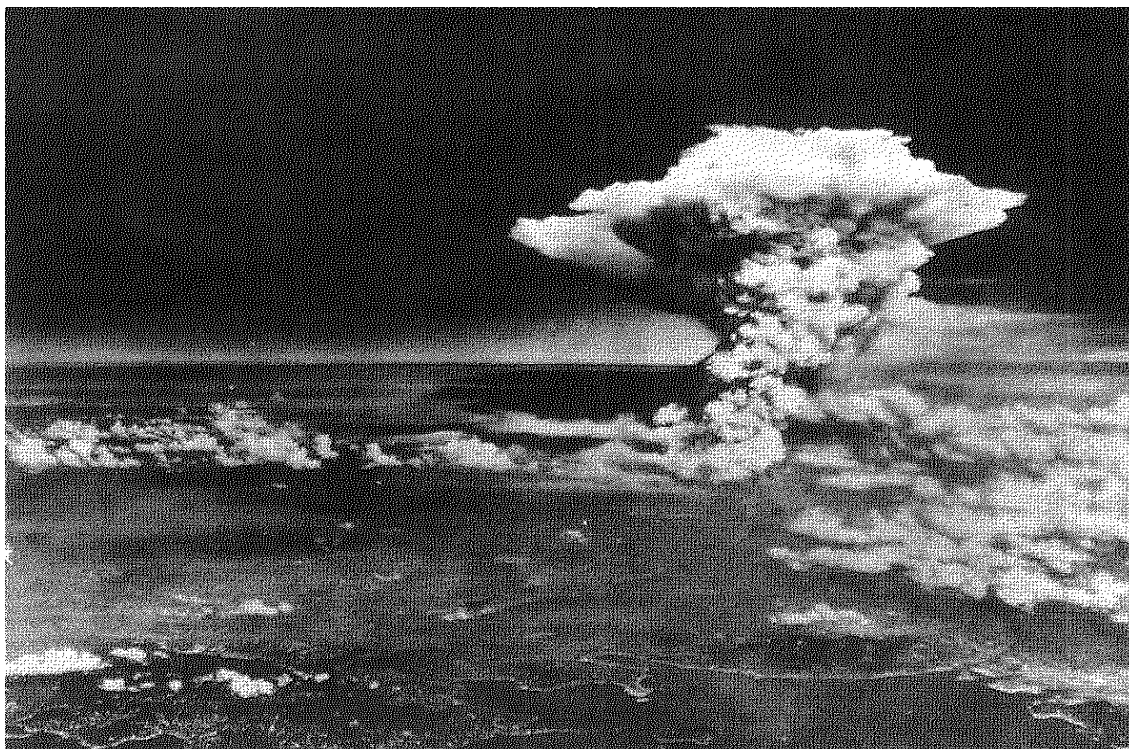
文・盈進中学高等学校ヒューマンライツ部（広島県福山市）

1968年創部（2005年改称）。現在、部員数は約25人。部長は高橋和さん。この連載は、今年の春に部員たちが2日間5時間以上にわたって坪井直さんに聞き取りした記録を中心に構成しています。（2016年8月『朝日中高生新聞』4週にわたって連載）

*この冊子は、ヒューマンライツ部が、『朝日中高生新聞』の連載記事に、加筆・修正したものです。

*連載の前段記事「『核なき世界へ』、つなぐ / 盈進中学高校ヒューマンライツ部 / 被爆体験聞き取りや署名集め」、および、資料は、巻末に収録いたします。

第1部 きのに雲の下は真っ暗だった



原爆投下直後、広島上空に上がるきのこ雲。手前は瀬戸内海：アメリカの原爆資料から

自己紹介をさせてもらいます。名前はね「坪直井（つぼいすなお）」いうんです。小中学生のころは「すなお」と呼んでくれる人はほとんどおらん。「なおし」「なお」「ただし」、しまいには「ちょく」って言われよった。なんだか、人間以外のものみたいに思われたような気がしてね。ずっと名前を言われるのが嫌いじゃった。

ところがね、原爆にやられて何十年かたって、両親も死んで、自分の名前をちゃんと呼んでくれる人がいなくなった。そのときにつくづく思った。「俺を『直（すなお）』と名づけたのは、生涯にわたって道を外れないようにがんばれよという意味だ」と。親に対しての感謝が生まれ、名乗るときに堂々と「直（すなお）です」と言えるようになった。



つばい・すなお

1925年5月5日生まれ。日本県原水爆被爆者団体協議会代表委員、広島県原爆被害者団体協議会理事長。

長く教員を務め、86年に広島市立城南中学の校長を最後に退職。

熱心にメモを取りながら、坪井先生の話を書く部員たち：広島市中区（広島被団協事務局にて）

●爆心から約1キロで被爆

実際の場面から話をしていきましょう。地図を見てください。71年前の8月6日、私は爆心地から約1キロ、広島市役所近くの路上で被爆した。広島工業専門学校（今の広島大学工学部）の3年生で20歳。学校に行く途中じゃった。9月に繰り上げて卒業することが決まっていたので、夏休みなんかありやあせん。

爆心から500メートル以内にいた人は、ほぼ100%死んだ。1キロ以内は60%が死んだといわれている。

私はその時、左の方からバーンと飛ばされた。その後、どうなったかは分からん。気づくと、まわりは真っ暗じゃ。原子雲が立ちのぼったんじゃね。木造の家が倒れて、壁のほこりがワーンとわいてきた。100m先も見えんのです。どっちがどうやら、東も西も分からん。

自分の体を見たら、ズボンは膝から下が焼けてぼろぼろじゃ。その先は、やけどで皮膚が黒々となっていて、血がパーッと出よる。「しまった」と、思ってね。腰からどす黒い血が、とにかく水のように流れていた。

●「アメリカめ、仕返しだ」

そのときにね、私がどう思ったかという「よくもやったな」です。「いつか覚えとけ。必ずかたきを取る。アメリカも覚悟せえよ」という気持ちになった。

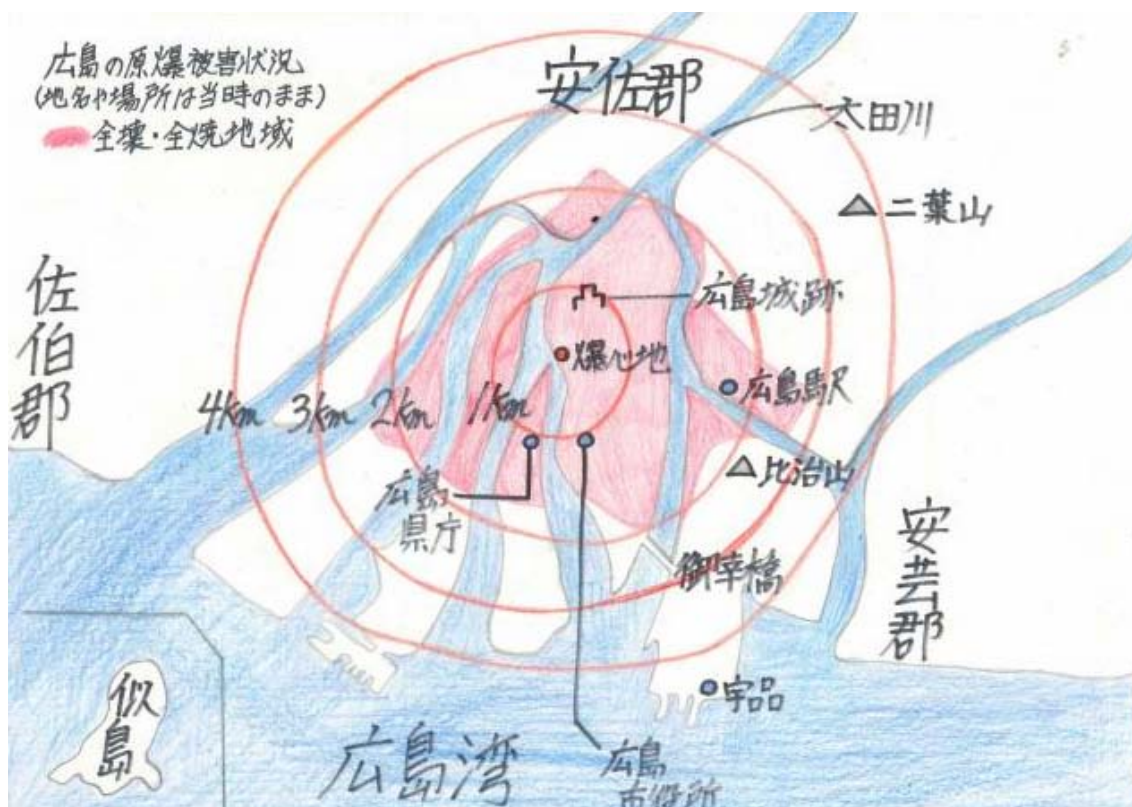
私は軍隊に入る検査に合格して、特攻隊に行くことになっていた。「覚えとけアメリカめ、今にやっつけたる。仕返しだ」。軍国主義でかたえられていたから、頭の中はそういうことばかりだった。

ところが、当人は何をしていたか分からん。どっちへ逃げりゃいいかも分からん。それでしばらくしてね、「よし、とにかく学校に行ってみよう」と思った。

逃げていく道中ね、みなさんのような若い女学生がおってね。右の眼が飛び出てね、プランプランとぶら下がったまま逃げている。私も頭から足までずるずる。背中が痛くてシャツを脱いだら、まだ燃えていたんですよ。火がついたまま逃げとった。

人が山積みになって、真っ黒になって死んだるんよ。馬も転げとるしね、電車も倒れとる。もうそれこそね、どこに顔があるか分からんような死体。手がパーンと飛んだるのはざらじゃ。腰から下が無い。首がどこいったか分からん。そんなばっかり。目が飛び出た女学生もたぶん死んだと思う。

途中で「助けてください」って言われた。でも、その人がどこにおろかが分からん。だから「どこですか！どこですか！」ゆうたら、向こうも答えた。「ここです!!」。でも、分かりやあせん。そうこうしとる間にね、火がブアッとあがってね。私は見捨てて逃げたようなもんじゃ。助けることができんかった。



●川は「死の川」になった

「水をください」ゆうたら、「水はちょっと待てよ。水飲んだら死ぬぞ」と大きい声で言われる。学校でもみな、そういう教育を受けていたから。しかし水どころじゃない。川の中に飛び込む者はおるしね。私も川に飛び込みたかったですよ、やけどが痛いから。水は少しは冷たいから、みなダーッと飛び込んだ。小さい子もね、泳げる泳げないは関係ない。そして、みな死んでいく。死んだ人がダーダーダー流れとる。死の川ができてたくらいじゃから。

●親戚のところに行ったが…

親戚のところへ行ってね。私が「おばさん、元気じゃったか？よう生きとったね。助かって良かったね」って言うた。そしたら、「あなた、どなたですか。私は知りません」言うんよね。私の顔、そんな時は、ぐちゃぐちゃになっとったからね。「坪井直ですよ。直です！直！」。なんぼ（どれだけ）ゆうてもね、「いや、直さんはもうちょっと

ね、痩せて、すらっとしとってえ。あんたみたいに、ぐちゃぐちゃじゃない」って言われた。そりゃ、その時はぐちゃぐちゃ。だから、「直」ゆうたぐらいじゃ（くらいだと）分かん。

爆風で、おばさんの家も壊れとるじゃろ。それを見て、「この家の2階にピアノがあって、あそこで、けいこさんら（親戚）と一緒に遊んだよ。きゃーきゃー一言（よ）うた直ですがね」。そんな独り言をゆうたんよ。そしたら、おばさんが「えー！うちの2階のことまでみな分かるんね！あなたほんとに直さんかー！」ゆうてね。

おばさんが、「どっかで治療薬を探して来るから、おんなさい。（いなさい）おんなさい」って。ですがね。「治療薬を探す」ゆうても、ありあせん（ない）。じゃったら、このままそこにおったら死ぬわ思うて、「おばさん、元気でがんばって生きんさいよ。私は大学へ行かにゃいけんのじゃ」ゆうてね。それでもおばさんは、「おんなさい、おんなさい」って、一生懸命止める。私はね、「生きにゃいけん」思うから、惨いことをしたんじゃ。年を取ったおばさんを蹴り飛ばすんですよ。そうせにゃ（そうしないと）、離してくれん。離してくれなければ死ぬ。そうして、私は必死に逃げたんですよ。

しばらく行って、死を考えた。覚悟決めた。そのとき前の方で立ち話した奥さんがね、「御幸橋（みゆきばし）のたもとに仮の治療所ができたそうよ。そこに行って、治療してもらいましょう」ゆうて、しゃべりよる。それを聞いてね、「あ、もう200mぐらいのもんじゃ。行けるかもしれん。がんばって行こう」と思ってね。

その200mも、みなさんやったらすぐ行けると思う。でも、私は1時間以上かかった。家がつぶれて影ができとるでしょ。今度は、あの影まで行こう。いざる（ほう）ようにして行った。次はあその影までがんばろうと、やっと橋のたもとまで着いた。でも、治療所も何にもありやせん。

第2部 生死を分けた御幸橋のたもと

●地面に「ここに死す」

8月6日午前8時15分原爆投下から約3時間後、御幸橋で中国新聞の松重美人（まつしげよしと）さんが撮った有名な写真がある。大勢の人が写っていて、ここに私がおるんです。

派出所の中に日陰があると思って入ったら、死臭がした。「こりゃだめ、ここには逃げられん」と思って、また出てきて橋のたもとに座ったんですよ。写真の奥の方が黒うなとるでしょ。燃えよるんじゃ、四方が。ここらの家も、こっちの家も、みな焼けてなくなった。

治療も何もないから、そこでは「本当に死ぬるな」と思ったんですよ。自分は半ズボンだけ。いつもポケットに入れていた在学証明書も焼けて、私を示すものは何もない。地面に座りこんで「坪井はここに死す」と書いた。

そこへね、軍隊が軽トラックでやってきて、救助活動を始めたんですよ。それを見なが

ら「私も連れてってくれんかな」と思ったりもした。でも、自分で声をあげることはできん。

軽トラだから、荷台に10人も乗ったらいっぱいになる。ピストン輸送してね。ところが、トラックの助手席から降りてきた軍人が「このトラックに乗れるのは、若い男性だけぞ。その他の者はだめじゃ。乗っちゃいかん！」ゆうんじゃ。「女や子どもは乗せない」ゆうことは、「助けない」ということ。おじいさんもだめ。「銃を持って戦争できん」ゆうてね、軍人は、そう思っとるんですよ。



原爆投下からおよそ3時間後の御幸橋。丸印で囲んだ人が坪井さん
(現在の御幸橋にある写真のモニュメントを撮影した。左下の拡大写真も)



写真左2枚は現在の御幸橋
坪井さんは、左端写真の生
走りように座っている



●火の方向へ逃げた少女

小学2年生くらいの女の子が軽トラのタイヤに足をかけてね、荷台のふちを持って中に入ろうとした。それを見た軍人が「おい、こら!!」って怒るんよ。ちょっとした大声をあげただけでね、その子はファーッと下に落ちた。私はそれを見とった。「乗せたれや」って言ったかった。でもだめじゃ。もし言ったら「この非国民が!! 軍隊に逆らうんか!」って言われて、ズドンと銃で一発やられる。そういう時代ですよ。

「かわいそうに」と思った。すると、その子はタッタタッと逃げ出した。火が燃えよる方向へ逃げた。その時にね、「同じ逃げるんなら、火のないところに逃げ!!」と、私としては声を限りに言ったつもりですが、その子が聞いてくれたかは分らん。大人でもみな死んでいくんですよ。子どもが1人でおったら。生きられるわけがない。

助けてやれなかったのが、負い目になっとるんよ。私を苦しめとる。ただ「原爆こんちくしょう」いう気持ちだけじゃない。そこに生きとった人をね、みな見殺しにしたんですよ。

そうこうしとるときに、警防団（地域の消防、防空を担う組織）が来た。「おい、その若者、どうしたんか。早く逃げ」と言う。「いや、もう歩けません」と答えたら、「よし、俺がなんとかしたる」とゆうてくれたんじゃ。

私は裸でしょ。太陽がカンカンと照とったからね。その人がどこかへ行って、おそらく自分のシャツを脱いできた。そうとしか思えん。そして、私に着せてくれた。

それから「おい、乗れ」ゆうて、その人が軽トラに乗せてくれた。トラックの中でも。日が差して暑かった。そしたら、若者が立ち上がって陰を作ってくれた。ガタガタと走るから、座とけばいいのに、私に差ししてくる日をさえぎってくれた。自分もやられとるのに、いつトラックからはね飛ばされて落ちるかも分らんのに。「がんばれよ」というような声もかけてくれた。私は「ありがとうございます、ありがとうございます」と何度も思った。



●同級生と再会

そして私は、港へ運ばれた。そこへ行った時には、すでに死体がいっぱいあった。そこで同級生に会った。「おお！坪井！おまえ生きとったんか。ようがんばってここまで来たな」って言った。南の約4kmのところ、似島（にのしま）という島がある。似島には、軍隊の施設があるから、仮の病院ができた。同級生が、「坪井！そこに行こう、行こう！」と言ったんです。「行こう。一緒に行こう！」って。

私は、目がつむっとるんか、あいとるんかわからんぐらい、顔がぐじゅぐじゅになってたから、「おう、ありがとう。でも、俺は長くは生きられんから覚悟を決めた。お前まで巻き添えにしちやいかんから、お前は生きろよ！一人で頑張れ！」とゆうて、私は行かないって言った。そしたらそいつが、「坪井！何を言うとんや！お前と俺の仲じゃないか。お前を見捨てて行けるか！おい、坪井！後ろに乗れ！」ゆうて、私を背負ってくれたんです。助けようと必死になってね。

そいつを見たら、大やけどしとった（していた）。立派な身体じゃなかった。「ひーひー」ゆうとった。自分は歩いた記憶ない。誰かが助けてくれた。だから今を生きとる。栈橋に行ってね、船に乗るときに、焦って海に落ちたやつを何人も見た。その時は、助ける人はおりやせん。溺れよっても、死んどつても関係ない。

●「今晚死ぬ」と言われて

島では衛生兵がね、船から降りてきた人に対して、「何号棟、何号棟」って言うんです。私は10号棟でした。その日のうちに死ぬであろう人は10号棟よ。もう今晚だめじゃ、と言われて。



生徒たちに体験を語る坪井さん（右）＝広島市中区（広島被団協事務局にて）

それが3日ぐらいしたら、多くの方は出ていかなければならなくなった。「何ですか！我々は、ここまでせっかく逃げてきたのに！」って言うた。そしたら、「おまえたちは軍隊じゃない。ここは軍隊の施設だから、軍人以外はみな出て行ってもらう」って言われた。みんな（原爆に）やられて、ひーひー言ってるのによ。それが軍隊ですよ。

でも私はほっとかれた。どうせ1、2日で死ぬるんだから。何百人もいるのに、担架で運ぶような暇は軍隊にはない。薬も何もあったもんじゃない。食事はもらったんか知りませんがね、とにかく私は「ほっとけ（そのままにしておけ）組」になったんですよ。「死ぬ者は死ねばええ」ってね。

そうして私は、似島に来て7日間ぐらいは意識があったんじやが、8月15日に戦争が終わった。負けた。その時には意識がなかった。いつ戦争が終わったのかも知らん。みんなは「戦争が終わった。今度は平和になれるぞ！」って喜んどったじやろうが、私には知らん。

9月26日にやっと目が覚めるんですが、その時にはもう家におりました。家でね母に「直、気が付いたか。もう戦争は終わったんじやぞ」って言われて「なにっ！」って。

今度はお母さんと喧嘩よ。私が「戦争が終わった？負けた？何を言うか！」「お母さん、戦場へ連れてってくれ」私は特攻の候補じゃったから。元気はええし、わりと真面目じゃったからね。戦争が早く終わらんかったら、ここにおらりやせんわ（いません）。特攻に行っとるんじやけ。特攻に行くつもりじゃたから親に食い掛かってね、「何を言うか！何？！日本が負けた？！ピラがまかれた？！それはあっちの宣伝じゃ！だ

まされるな」親も私に一生懸命怒った。

話はちいと（少し）それるんじやが、母親に聞いたことなんじやけど、救護所にいたときに母親が探しに来たんですよ。「直や〜。直はおらんか〜」ってゆうてね。諦めかけた最後の病室でね、私は無意識に手を挙げたそうなんですよ。「直はここにおるよー」ってね。私にその時の記憶は全くないがね。

家の中で物を持って歩けるようになったのがあくる年の夏じや。何日かいうのは覚えてないが、言うようにして歩けるようになった。

第3部 命ある限り「ピカドン先生」

●8月6日を知っとるか

戦後、すすめてくれる人がおってね、先生になったんですよ。学生のときは、工学部で飛行機のプロペラのエンジンを研究しよった。畑ちがいじやったが、みんな戦争に行って男の先生がおらん。じい一つとしていても生きておれんじよ。音戸町（おんど / 今の呉市）や広島市の中学や高校で数学を教えたんじや。



体験を語る坪井さん＝広島市中区（広島被団協事務局にて）

「ピカドン先生」ゆうのは、自分から言い始めたんよ。私の体は、今はちょっとええなっとるけどね、頭から足までずるずる。上くちびるは、水ぶくれではれあがっていた。恥ずかしくてマスクをかけたくても、耳もずるずるじやけ、できやせん。夏にすっ裸になったら、背中はやけどの跡がチーズのようじや。そんなんで授業に行っとったからね。生徒

たちに「お化けが来たんか」と言われよった。

それで中学の先生になって最初の8月6日の前に、「おい、今日は数学の授業はやめた。私の話を聞け。8月6日を知っとるか」と聞いたんよ。当時の子は、よう知ったよ。「私実際に原爆を受けたときの話をしよう。あの日より前は、きれいな美男子だった」としやべった。

子どもたちは喜んだやろ。数学をやらずに、国語の話がええゆうて喜んだ。それから約40年、1回も欠かしたことはない。

●差別にあい、支えられ

当時は、戦争でみな貧乏だったから、学校を休む子がおる。今でいう不登校じゃ。我々の時代の不登校は、仕事をしないといかんかった。中学生になったら、漁をするとか、畑を耕すとか、そういう仕事を大人が子どもにさせるんじゃ。漁師さんじゃったらね、夕方から漁に行って、夜中の1~2時に帰るんじゃ。それでも学校は「朝8時に来い」と言う。「出てこいゆう方が無理だ」と私は思うんじゃ。

当時は先生が学校に宿泊したので、私は朝の2時、3時まで彼らの服のほころびを直しよった。なかには、1か月ぐらい風呂に入っとらん子もおる。それで、子どもたちを順番に銭湯に連れていった。ある日、銭湯の人が「先生、あなたがみんな金出しとるんですか」と聞くんじゃ。そうしたら「何とかしちやろう」ゆうて、子どもたちが出た後にお金を返してくれた。そういう人助けもやってくれました。

●ある生徒との再会

忘れもせん。西の山に陽が落ちて、ちょっとロマンティックなところよ。「はあー、美しい夕日が今日も暮れていくな」と思った。

そうしよったらね、下の方からね。2人女の子が「坪井先生！」と、来たんよ。私はね



「暇ならちょっと上がって話そうや」ゆうた。そして音楽室で、女の子2人がピアノをちょっと簡単弾いたりしてね。最初は、遊びよったんよ。しばらく、毎週土曜日になれば、2人と会いよった。

ある時、そのうちの1人に「あなたは、私がどの学校に勤めとるときの生徒かいな」って尋ねた。「教えてもらったのに、覚えてないんですか」ゆうんじゃ。私が、「あれー！黒板ばかり見よったけ、分からんわ！」って、笑い話になったんですよ。教えるのに一生懸命じゃったけえねえ。でも、「教えてもらうた」言うけえ、「そりゃ、悪かったの」って答えたら、「1番ええ先生じゃった。1番よう（よく）怒られた」ゆうてくれたんです。

「おもしろい先生は誰か」って聞いたら「坪井先生」って答える。「怖い先生は」ゆうても「坪井先生」って答える。でもね、最後に、「おもしろくて、いろいろと私らのこと考えてくれるのは、やっぱり坪井先生じゃ」ゆうてくれたんです。うれしかったな。



生徒たちに体験を語る坪井さん（右）＝広島市中区（広島被団協事務局にて）

●2人でデートを重ねて

2人きりで映画に行ったこともある。でも一緒に入れんから、私は先に、すっと入る。あとから彼女が来る。なぜかって言うとね、昔は町の雰囲気かね、男女が一緒に歩いとるゆうのが絶対ありえんのよ。いかにも1人で行ったって感じておらんかん。中入ったら、一緒になって、ぺちやくちゃぺちやくちゃ話しよった。ま、そういうことがあって、だんだん仲良くなっていったんじゃ。

●被爆者といっしょになっても

そうしていくうちに、「いけん。生半可に付き合ってたらいかんわ」っと思ってな。だからといって「結婚しよう」とは、最後まで言わんかった。なぜかゆうたらね「被爆者が結婚できる体ではない。そう思い込め」と自分に言い聞かせよったからね。



生徒たちに体験を語り、涙ぐむ坪井さん（右）＝広島市中区（広島被団協事務局にて）

じゃがね、3年経ち、4年経ち、向こうも結婚もせずにおった。そうこうしよるうちに、向こう（彼女）が、「彼は被爆者じゃ」ゆうことを2年目ぐらいに知ってね、向こうのお父さん、お母さんが「あんなやつと遊ぶんじゃない」ゆうて、彼女が説教をくらう。「被爆者はあと2、3年したら、みな死ぬる。そんな者と結婚して、おまえ、どうするんな。すぐ未亡人になるで」って、親が説教する。で、親戚中が言い出した。「あれは被爆者じゃ。いつ死ぬるかわからん。坪井といっしょになるな」って言われる。向こうの家から毛嫌いされた。私は一生懸命やったつもりじゃったんじゃが…。

そういうことがあって、私から彼女に、「言っとくが、私はあんたといっしょになっても、すぐ死ぬるかもしれん。だからね、結婚できそうにないわ。まあ、あんたも好きな人ができたら、私に教えてくれ。私が一生懸命、世話したるけえ」ゆうたりしよった。

しかし、いつの間にか、どちらも愛が芽生えてきた。惚れる心が出はじめた。

ところが彼女は、家から外へ出してもらえんようになった。「1人じゃ、絶対出さん」。ゆうことになった。付き合って、4、5年ぐらい経って、そうゆうことになったんですよ。「付き合ってるの男が被爆者じゃ、娘がかわいそうな」ゆうことでね。

そうしよったら、彼女がちょっと体を壊した。ずっと家で寝とる。「お見舞いにきました」ゆうてもね、上がらしてなんかもらえん。「汚らわしい」「娘を誘拐する気か」ゆうて、怒られた。

●この世でダメなら、あの世で…

そのうちに、彼女は元気になってね。親がおらん時にこっそりと会いました。ある日ね。薬局へ行って睡眠薬を買いました。「お前といっしょになるのは、もうこりゃ、だめじゃ。

この世ではだめじゃから、あの世でいっしょになろうや」。こうなってね、睡眠薬を開けてね。どれだけ飲んでいいのかわからんが・・・

小高い丘の、誰もおらんようなところに行って、草の上に座り込んで、2人で飲んだんですよ。しばらくしたら「ぐあー」と、2人とも寝た。死んで、誰かが見つけるかもしれんが、そういうことは考えちゃおらんかった。



ところがね、私は夕方ぐらいに、はっと起きたんですよ。目が覚めた。「おれは死んどらんわ！こりゃ、いけん！」ってね。「飲みようが足らんかったんじゃ！」思うて、もう1回飲もう思うたらね、そしたら、彼女も起きたんです。なんでか、わからんがね。「お前、目が覚めたんか」言うたら、彼女が「何があったんか」ゆうような返事をした。そのときはもう、星も出よったかもわからんな。

「おい、われらはこの世ではいっしょになれんいうことになって、あの世でいっしょになろうって、誓いを立てて飲んだ。じゃが、あの世でもいっしょにさせてはくれんのんじゃな」としみじみと話をした。

だから、われらは、とにかく、「どういことがあっても、生き延びようで」ゆう誓いを立てた。そして、握手したんですよ。その時に初めて握手した。まあ、今は墓の下におるんですけどね。この前の彼岸の日にもね。墓に行って、「おい元気か？今に行くからな」言うたんですよ。

そういうことがあって「何があっても、自分で死を選ぶようなことはもうやめよう」ゆうて。それからね、ちょっとだけ、彼女は明るくなった。

●PTAの役員が助けてくれた

男はね、結婚してなくてもへっちゃら。何も言われん。でも、女の子は、「あの年でまだ、

うろうろしよるんか。もらい手がないんじゃ」というようなことを言われる。1年、2年経って、そういうような昔の悪い社会構造の中でも、彼女はなんとか頑張って、私を待ってくれたんです。

そうこうしとるときに、お義父さんが亡くなった。

PTAの役員さんが助けてくれたんですよ。「坪井は、立派な人じゃ」。って向こう（彼女）のお義母さんにゆうてくれたんです。「坪井といっしょにさせなさい」ってことを、ようけい（たくさん）ゆうてくれたんですよ。朝の2時、3時まで、生徒の服を繕っていた私のことを知るとるからね。「ああいう人はおらん、『結婚させん』なんて、何を言うか！被爆者じゃからというて、差別はいかん！」ってゆうてくれた。私自身がゆうたんじゃ、角がたつからね。そしたら、向こうのお義母さんや親戚が動き出してね、「坪井は立派な人ですわ」ゆうてね。医者「3年で死ぬる」ってゆうてたけど、それでもまだ生きとる、5年も6年も生きとる。「こりゃあ、まだ生きるかもわからん。大丈夫じゃ、死にやあせんわ」ゆうことになってね。とうとう結婚できるようになったんですよ。

しかしね、それでもまだね、お義母さんや親戚はね、晴れ晴れしく結婚式をやったらね、親戚中に何かされたり、物別れされたり、何か言われるかもわからん。だから、「出さにやいかん」ゆう話になった。「出さにやいかん」ゆうのは、「ここへは生まれん」いうことよ。「どっかに行かにやいけん」ゆうことになって、山の方（広島県北西部）へ行ったんよ。よそへ行くのは、前から決まっとった。教育委員会が決めとった。でも教育委員会と喧嘩になってね。教育委員会が、「一年待ってくれ」言うて、山の方へ行くのが、1年延びたんですよ。結婚もしたかったが、1年延びた。

1年後、熊野いうところ行ったんですけどね。そこで、夫婦生活が始まったんですよ。結婚してね。2人で「命ある限り生き抜こう！」ゆうてね。

しかしね、私は病気することが多いでしょ。だから彼女はね、時に言いましたよ。「私は何のためにいっしょになったんでしょかね」って。結婚して20年後ぐらいかな、子どもがみな、大きくなった頃「私はあなたといっしょになったか、私は、病院の看護師と同じようなもんじゃ」ゆうてね。私が病院ばかり、しょっちゅう行きよったけえね。向こう（彼女）は、そうゆう愚痴もこぼしたしよったね。

22年ぐらい前、彼女が脳卒中になってね。朝5時ごろ死んどった。私は病気が多くてね、その合間をぬうように仕事をやったんです。結婚しても新婚旅行なんて、そんなことは、できやせん。私が60歳で定年退職した後ね、北海道に10日以上おったかな。

●どっかい生きとった

先生をしているときは、学校をちょいちょい休んだ。10回以上も入院しとるから。だから担任を持たせてくれんのですよ。学年主任とか教務主任とか、そんなんばかりやらされてね。私が卒業させた学年は3つしかない。それもみな、あなたらが生まれる前に卒業させた。

担任を持たせてもらえなかったのは、悲しかった。病院で「死のテープレコーダー」ゆうのをとったんよ。寝床で生徒たちに「おれは病気があるから、卒業式にも終業式にも出

られんかもしれん。みんながんばれよ」ゆうのを録音した。

がんは2つあって、特別な貧血症も起こしてね。今までに3回はね、病院で「今晚もうだめだから親戚みな集めなさい」って言われた。原爆を受けてすぐならわかるよ。でも10年、20年たつとるんよ。そんなにたつてから危篤状態になった。いつ死ぬるかわかりません。

病院の先生とは今もときどき会いますけれど、「あのときのことは言ってくれるな」と言われる。「死にますから、みな集めて」と宣告されても、おっとどっこい生きとったんです。

誰かが私を生かしてくれとるんです。それが神であっても、仏であっても、あるいは人であっても何でもいい。私はそういうものにね、生かしてもらつとる。

私がずっと一本通しとるのは、「命を大事に。命ある限り生きていこう」ゆうこと。それが私の一番の中心。あなた方に会うときも「命を大事にしてくれ」と言う。この言葉だけは、墓場に行っても、どこへ行っても持っていく。だからね、戦争なんか「何を言うか！」です。命の取り合いをする戦争は、絶対にいけん。



生徒たちに体験を語る坪井さん（右）＝広島市中区（広島被団協事務局にて）

【被爆者をめぐる戦後の状況】

1945年8月6日に広島、9日に長崎に原爆が投下され、直後の死者は20万人以上にのぼりました。生きのびた被爆者にはその後10年以上、救済の手がさしのべられず、病気や貧しさ、差別に苦しみました。

54年、太平洋のビキニ環礁でアメリカが行った水爆実験で日本の漁船「第五福竜丸」が被害にあったことをきっかけに、原水爆禁止の声が高まります。56年8月に被爆者でつくる全国組織、日本原水爆被害者団体協議会が誕生。翌年、原爆医療法ができて、国による被爆者への支援が始まりました。

第4部 核なき世界へ ネバーギブアップ



2015年4月 広島被団協主催「空白の10年」学習会にて。会場に「ネバーギブアップ！」
(広島国際会議場にて)

●反対意見も聞く姿勢で

60歳になって先生を退職するときに「あんたは平和教育から逃げちゃいかんぞ」と言われた。広島県原爆被害者団体協議会の「事務局長がおらん」ゆうことになって、引き受けた。それから30年になります。

これまでに21回も外国に行った。アフリカ、ヨーロッパ、パキスタン、中国、北朝鮮…。アメリカには8回くらい。核実験をやっていると聞けば、「馬鹿者！」と言いに行かにゃならん。

いろいろなところで、いろいろな話をしてきましたがね。「相手を選ばず」ゆうことが大切。自分の考えと違っていてもね、聞くだけは聞く。アメリカの大学生は「原爆を落としたのは正しかった」ゆうからね。「そうか」「そうか」って聞いたるんです。聞いてやって「俺はそうは思わない。多くの人間を殺す原爆が正しいと言えるか」と返す。

自分の仲間にだけ伝わるようではいかん。自分の思いだけでなく、相手のことも考える。現実には気に食わんことがたくさんあるよ。あってもね、あきらめちゃいかん。「おい、お前も人間じゃろう。俺も人間じゃ」ゆうて、手をつなげるようにならにゃいかん。

そのためには、あきらめる心があってはならない。それをちょっとかつこよさげに言うて「ネバーギブアップ」ゆうもんでね。

●オバマさんと共に歩む

オバマさんに「広島に来てください」と、初めて手紙を送ったのは7年前になるかね。

チェコのプラハで、何万もの人を前に「核兵器のない世界をつくろう」と演説したのを聞いて、この人とならいっしょにやっていると確信した。それから毎年のように手紙を送り続けた。

(5月27日に広島を訪れた) オバマさんと話せることが分かったのは、式典が始まるちょっと前よ。ひとつ、ふたことだって言うけどね、まあ心臓が2つ、3つになったかと思うくらいドキドキした。

オバマさんの演説も半分くらいしか聞いちゃおらん。何を言おうか考えて、「過去・現在・未来」を話そうと思った。

「91歳の被爆者である坪井直(つぼいすなお)です。よう来てくださいました。私たちは、あなたに謝罪を要求することはありません。あなたが来られて大歓迎です」ゆうようなことを言った。ここまでが過去。そうしたら、オバマさんの表情がふっとゆるんだんよ。

「いま資料館を見てこられたが、ちょっと時間が短いねえ。原子爆弾の全体像を分かるには、実際の被害を受けたものや人をその目で見にやいかん。被爆者に話を聞かにやいかん」。まあ、現在については説教じみたことをゆうたんです。

「しかし、あなたはね、来年の1月には大統領を辞めて普通の人になられる。そうしたら時間が少々あると思いますので、広島にたびたび来てください」。これが未来じゃ。この対話はゴールではなく、スタート。「未来志向で、オバマさんがプラハで言った『核兵器のない世界』へ私たちも行きますよ」ゆうたら、握っていたオバマさんの手の力が強まった。



坪井さん自身が取り上げられた海外の新聞記事を生徒たちに紹介しました：広島市中区(広島被団協事務局にて)

●憎しみを越えて未来へ

原爆を受けてからずっと「こんちくしょう！ 今に見とれ、かたきを取るぞ！」ゆう気

持ちでやってきたのが、オバマさんに会ったときには「あなたに謝れとは言いません」となった。だいぶ変わったね。

何で変わったかゆうたらね、私が先生になったころは、テレビも何もないんですよ。だから、私が勉強してきたことは間違いだったかどうかを図書館で調べ始めた。

私は20歳で原爆を受けとるでしょう。そのときまでにきたえ上げられた教育は、いわゆる「軍国教育」。日本は、神話が政治の中に入っとった。「神の国」だから、戦争に負けるわけがない。そうやって私は軍国少年になった。先生になって、たくさん本を読んだことが、私の見方を広げてくれた。外国へ行った経験も大きい。

私の憎しみ「アメリカの野郎……」ゆう気持ちは、今でも腹の底の方にはありますよ。でも、それを乗り越えにやいかん。どうして乗り越えられるかゆうたら、人類の幸せを考えるから。「人類が幸せになるために核兵器はいりませんよ」ゆうことです。オバマさんも同じように考えている傾向があるね。

あなたがたが今日、私に聞いたことを誰かに話す。私は、それが一番大事だと思うとるんです。自分の意見と反対の人がおってもええんよ。それでも話をすればいい。人類の知



恵ゆうんはね、ただ原爆を作っただけじゃない。まあ、あれは知恵のうちに入らんがな。人間ゆうのはね、すごい力を持つとる。じゃから、あきらめちやいかんですよ。

私は明日死んだってね、苦にはならんよ。みなさんは、体を大事にしてね、病気をしないようにがんばってください。体が第一だから。ここまで、よく話を聞いてくださいました。どうもありがとう。

写真左：オバマ大統領が最初に握手した被爆者が坪井直さん



生徒の質問に笑顔で答える坪井さん：広島市中区（広島被団協事務局にて）

「核なき世界」へ、つなぐ

盈進中学高校(広島県福山市)ヒューマンライツ部

被爆体験を聞き取りや署名集め

●「この暑さ、71年前も」

7月最後の週末、世界遺産の原爆ドーム前で署名を訴える中高生の姿がありました。「核廃絶の署名にご協力をお願いします」「署名はすべて国連に届けます」。盈進中高ヒューマンライツ部の20人です。

部長で5年間署名活動を行っている高橋和さん(高2)は「署名集めはネットでもできるけれど、この季節に街角に立たないと分からないことがある」と力を込めます。高2の作原愛理さんは、「71年前もこんなに暑かったのかな、川を死体が流れていたのかな、地面の下には今も骨が埋まっているのかなと想像します」。

あたたかく声をかけてくれる人もいれば、「そんなことをして何になる」となじられることもあります。「違う意見にも耳を傾ける。それが相互理解の第一歩」と部員たちは考えています。

ヒューマンライツ部は名前が示す通り「人権(ヒューマンライツ)」について考える部活動。被爆者、ハンセン病の元患者、沖縄戦の体験者への聞き取りなどを続けています。

昨年8月、当時の部長、橋本瀬奈さん(高3)が日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)の集まりで、広島原爆で亡くなった曾祖父について、調べたことを話しました。警察官だった曾祖父は、爆心地で敵機の監視業務中で、遺骨も残っていません。

「会ったことはないけれど、父とよく似たひいおじいちゃんの写真を見て親しみがわきました」と橋本さん。「被爆者の方は『同じ過ちを繰り返してはならない』と体験を語る。幼い子を残して死んだひいおじいちゃんも、同じ思いなのかな」



原爆ドームの前で「核廃絶! ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」に立つヒューマンライツ部員
右から2人目: 部長の高橋和さん。3人目: 作原愛理さん。左端: 高橋悠太君(2016年8月)



被爆 70 年「市民のつどい」(主催: 日本被団協)にて、高校生代表でスピーチする橋本瀬奈さん(写真:上)
 スピーチ後、坪井直さんから「感動した！頼んだよ！」と言われ、固い握手を交わす橋本瀬奈さん(写真:下)
 会場: 旧広島県長跡地に立つ広島市文化交流会館(広島市加古町: 2015 年 8 月 5 日)

●握手した気持ち分かった

橋本さんの話に心を動かされたのが、日本被団協代表委員の坪井直(つばい すなお)さん(91)です。今年の春、生徒たちの聞き取り活動に応じてくれることになりました。話は、被曝体験から、「ピカドン先生」と名乗った中学教師時代、世界に向けて核廃絶を訴え続けた日々へと広がりました。

オバマ大統領の広島訪問が決まったとき、作原さんは大統領に宛てて英文の手紙を送り、被爆者、なかでも「坪井直さんに会って直接話を聞いてほしい」と訴えました。

オバマ大統領と坪井さんの対談を作原さんは式典会場で、多くの部員はテレビで見守りました。坪井さんは謝罪を求めず、握手を交わしました。

坪井さんの話を冊子にまとめる作業を進めている高橋悠太(たかはし ゆうた)さん(高1)は、その気持ちが分かったような気がしました。坪井さんのこんな言葉を思い出したからです。

「意見が違って『俺もお前も人間じゃないか』、そう言って手をつなぐ。ネバーギブアップ(あきらめない)」

部員たちが聞き取った坪井さんの半生は、今週号から始まる連載「にんげん坪井直」(全4回の予定)で報告してもらいます。(裏面から連載開始)



写真左と左下：核廃絶の署名を集める作原愛理さん(2016年8月5日)。写真左右：国連で核廃絶を訴える作原愛理さん坪井直さんの証言も盛り込んだ(2015年5月)。写真右：広島平和記念式典終了後、福島から式年に参加していた被爆者遺族に、放射線被害について質問する橋本瀬奈さん(2016年8月6日)





ヒューマンライツ部の部員たち：広島県福山市の学校で（2016年10月の文化祭（感謝祭）終了後）

資料1：作原愛理さん（当時は高校2年生）がオバマ大統領にあてた手紙（送ったのは手書き）

Dear U. S. President BarackObama

あなたが広島を訪れることを決めたと聞き、とてもうれしいです。これは私の願いでした。

I'm so glad to hear that you decided to visit Hiroshima. This was my wish.

ケリー国務長官が広島を訪れ、予定にはなかったのに原爆ドームを見に行ったことに感動しました。

I was so moved that the Secretary of State John Forbes Kerry visited Hiroshima, and he also visited the atomic bomb dome in Hiroshima, even though it was not on his schedule.

私は日本の広島に住む一人の高校生です。

I 'm a high school student who live in Hiroshima, Japan.

私は核廃絶のための署名を集めています。

I take part in activities for abolition of nuclear weapons and try to collect signatures against them.

それは、広島に生まれ育つ私の使命です。

I feel like it's my responsibility because I was born and live in Hiroshima.

その中で、何度も被爆者の方々から話を聞かせてもらってきました。

Through the activities, I have met many atomic bomb survivors and heard their stories. (Atomic bomb survivor are known as "hibakusha" in Japanese.)

彼らは原爆によって家族、友だち、希望など多くを一瞬にして奪われたと知りました。

I knew that atomic bomb took precious lives of their family, friend and their hope in a flash.

なのに、なぜか彼らは人間的にとっても優しいのです。

However, they are very kind to others for some reasons.

彼らの姿(人生)から、生きる強さ、人としてどう生きるかを学びました。

I learned a lot from their experiences such as strength to live and also learned how to live as human beings.

彼らの話は迫力があり、本や新聞のどんなものよりも、核兵器の恐ろしさを伝えます。

Their stories are so moving and impressive. I guess no books or no newspapers can tell the fear of nuclear weapons more clearly than their stories.

悲しいですが、いつまでも彼らの話は聞けません。被爆者の平均年齢は80歳を超えました。時間が無いのです。

Sadly, I think we won't be able to listen to their stories forever. The average age of them is over 80 years old now. And, there is not more time.

だからこそ、広島にできるだけ早く訪れ、被爆者の方々の話を聞いてほしいです。

So, I want you to visit Hiroshima as soon as possible and try to listen to their stories.

特に、日本原水爆被害者団体協議会代表委員の坪井直さんはあなたにお会いしてもらいたい一人です。

Especially, Mr. Sunao Tsuboi, a Chairperson of Nihon Hidankyo (Japan Confederation of A- and H-Bomb Sufferers Organizations) is the one I really want you to meet.

また、昨年4月、私はNPT再検討会議に合わせて、日本の外務省から「ユース非核特使」として、ニューヨーク国連本部に派遣されました。

Also, I was dispatched to the United Nations as a member of “Youth Communicators for a world without Nuclear Weapons” by the Japan Ministry of Foreign Affairs and had a chance to visit the U.N in New York.

世界の核軍縮に携わる人々へ、プレゼンテーションさせてもらいました。

I had a chance to give presentation to people who work for the U.N. especially engaging in nuclear disarmament.

テーマは連帯。被害や加害を超えて、様々な国と連帯するべきと訴えました。

The main theme of our presentation was solidarity. I appealed to them that we have to promote solidarity among countries not to cling to the position of assailants or a victims.

その詳しい内容は同封しています。

I enclosed the details of our presentation in the envelop, so please take a look.

そして、私たちの学校は他校とともに、あなたの母校であるハワイのプナホウ高校と毎年平和交流しています。

Our school interact with other schools and we also hold an exchange program with your old school Punahou high school. We communicate each other and exchange ideas or opinions on the issue of world peace every year.

ピータソンひろみ先生という、日本語教師で父が被爆者の先生がいらっしゃいます。

At your former school, Punahou high school, there is Ms. Hiromi Peterson, a Japanese language teacher and her father was hibakusha.

彼女は英語圏に住む中高生用に教科書をつくり、その印税を学校に寄付しています。

She made English textbooks about Japanese culture, history and language for junior and senior high school students of Punahou school. Then, she donated the royalty to her school.

彼女のおかげで、毎年8月6日に合わせて、生徒二人と先生一人が広島に派遣されるのです。

Thanks to her, two students and one teacher can visit to Hiroshima every year.

プナホウと広島の高校生が国境を超えて交流できます。

Students from your school and students from Hiroshima or other areas in Japan can interact each other crossing the border.

プナホウ高校の生徒にとって、原爆を学ぶことは、自国の加害の面を知ることを意味します。

For Punahou high school students, learning about the atomic bomb means knowing the truth of the A-bomb and they can see a lot from the assailant's point of view.

それでも、彼らはあの日広島で何が起こったかを真剣に学ぼうとしていました。

However, they tried to learn what happened to them in Hiroshima, on that day, August 6th in 1945.

それがすごくうれしかったですし、私も彼らのように他国のことに目を向けようと思いました。

I was so glad even the students from other country tried to think the matter pretty seriously and tried to accept the reality of Hiroshima.

あなたの後輩も広島を学んでいます。

Your juniors are also try to learn about Hiroshima.

最後に、あなたのプラハ演説にとっても感動した。

Lastly, I was so moved by your speech in Prague.

“So today, I state clearly and with conviction America's commitment to seek the peace and security of a world without nuclear weapons. (Applause.) I'm not naive. This goal will not be reached quickly -- perhaps not in my lifetime. It will take patience and persistence. But now we, too, must ignore the voices who tell us that the world cannot change. We have to insist, "Yes, we can."

私はこのフレーズがすごく好きです。

I like this phrase very much.

スピーチの「世界を変えられない」というフレーズのように、私も署名活動をしている時に「核廃絶はできない!」「高校生は家で勉強しろ!」と言われたことがあります。

When I was collecting signatures to abolish nuclear weapons, some said, “To abolish nuclear weapons is impossible!” and “The high school student should go home and study !!” When I heard such words, I thought that “the world cannot change.” just as in your speech.

あなたがおっしゃるように、核廃絶はすぐにはできないと私も思います。

As you said, we can 't abolish nuclear weapons so quickly.

しかし、活動を続けることで、私は世界から核兵器を一発でも減らすことができると信じています。

But, I believe we can even reduce the number of nuclear weapons from the world by continuing our activities.

このスピーチから最も大切なのは粘り強く進むことが大切だと確信しました。

From your speech I have learned a lot and now I'm sure that the most important thing is to keep on and work tenaciously.

私の背後には、被爆者や戦争体験者の方々、先生、活動の仲間、家族…。たくさんの方がいます。彼らはみな私を支えてくれています。

There are a lot of people, A-bomb survivors or war survivors, teachers, friends and my family behind me. They all try to help and support.

私一人のメッセージではなく、どうかみんなのメッセージとして受け取ってください。

Please receive this letter as not only my message but everybody's.

広島で待っています。

Everyone are waiting for you in Hiroshima. We really welcome you to Hiroshima!!

最後まで読んでくださりありがとうございました。

Thank you very much for reading my letter to the last.

資料 2：被爆 70 年「市民のつどい」(主催:日本被団協)にて、高校生代表のスピーチをした橋本瀬奈さんの原稿

日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会） 被爆 70 年記念集会

2015. 08. 05

高校生代表スピーチ（限定 5 分）代表 橋本 瀬奈（盈進高等学校 2 年/ヒューマンライツ部長）

（於：広島文化交流会館 / 旧県庁跡地）

広島県・福山市にある盈進高等学校の橋本瀬奈です。本日はこのような機会をいただき、心から感謝申し上げます。

「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない」。これは、被爆者の敵対と憎しみを超えた素朴で崇高な平和の思想です。

被爆者の平均年齢が 80 歳を超えた今、私は、核廃絶と世界平和のために、この思想を何としても後世に伝えねば、と思っています。

私は、そのためにも、昨年から本格的に、「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」を学校や他校の仲間と行っています。今年は学校代表です。

誰よりも笑顔を絶やさず多くの署名を集める。この夏、自分に与えた課題です。しかし、次のことばが現実です。「核抑止こそ平和の道。核廃絶は平和ぼけ。日本も核を持つべき。」

しかし、私は、被爆者や市民の方々からの「ありがとう」のことばを信じています。

私の父方の曾祖父は、原爆に命を奪われました。でも、私は、いつ、どこで、どのように亡くなったかについて、詳しく知ろうとしませんでした。

しかし、署名活動にあわせ、核廃絶の思いを強くし、曾祖父に会いたくなりました。

そして先月 7 月、やっと会うことができました。写真があったのです。

曾祖父は広島県警の警察官。32 歳でした。ちょび髭のきりっとした顔つきで、家族といっしょに写っていました。やっと出会えたという嬉しい気持ちとともに、どうして死ななければならなかったのかという悔しさと悲しさがこみ上げ、涙がこぼれました。

曾祖父は、単身赴任で広島に勤務中、亡くなりました。遺骨も遺品もありません。亡くなった場所も分かりませんでした。ただ、親戚に語り継がれた曾祖父の最期の言葉が残っていました。「水がほしい」。妻と子ども達を遺し、さぞ、無念だったことでしょう。

今夏、私は、家族と、「あの日」の曾祖父を探しました。県警本部にも問い合わせ、調べてもらいました。そして昨日 4 日、県警から連絡がありました。曾祖父は県警から県庁に派遣され、敵機偵察業務にあたった時に、原爆の閃光をあび、亡くなったということでした。

そして今日、この会場（広島文化交流会館）に来て、びっくりしました。この場所が、旧県庁だったのです。曾祖父は 70 年間、私や家族を探していたのかもしれない。曾祖父が、この地で、私と家族を待っていてくれたと思うと、胸がいっぱいです。

今、核兵器の「非人道性」を中心に、核兵器禁止条約を結ぶ動きが世界に広がっています。日本も「人道の誓約」にサインし、核の傘から脱却すべきです。

そして、集団的自衛権の容認は撤回すべきだと、私は思います。

県被団協・坪井直理事長はこうおっしゃいます。「命の奪い合いをする戦争は絶対反対。一瞬にして多くの命を奪う原爆は絶対悪」。私もまったく同感です。

広島平和文化センターの小溝泰義理事長はこうおっしゃいました。「核抑止論はおどしの平和。廃絶のために、私たち市民の小さな運動の積み重ねと連帯こそ最も効果的だ」。私もそう確信します。

先日、うかがった 82 才の女性の涙が忘れられません。「私たち夫婦 2 人は被爆者で、障がいを持った子どもが生まれるのを恐れ、子どもはつくらないと約束していました。……みなさんに知ってほしいことは、被爆者は誰もが、こんな思いをしながら生きてきた、という事実です」。これも、核兵器の非人道性です。

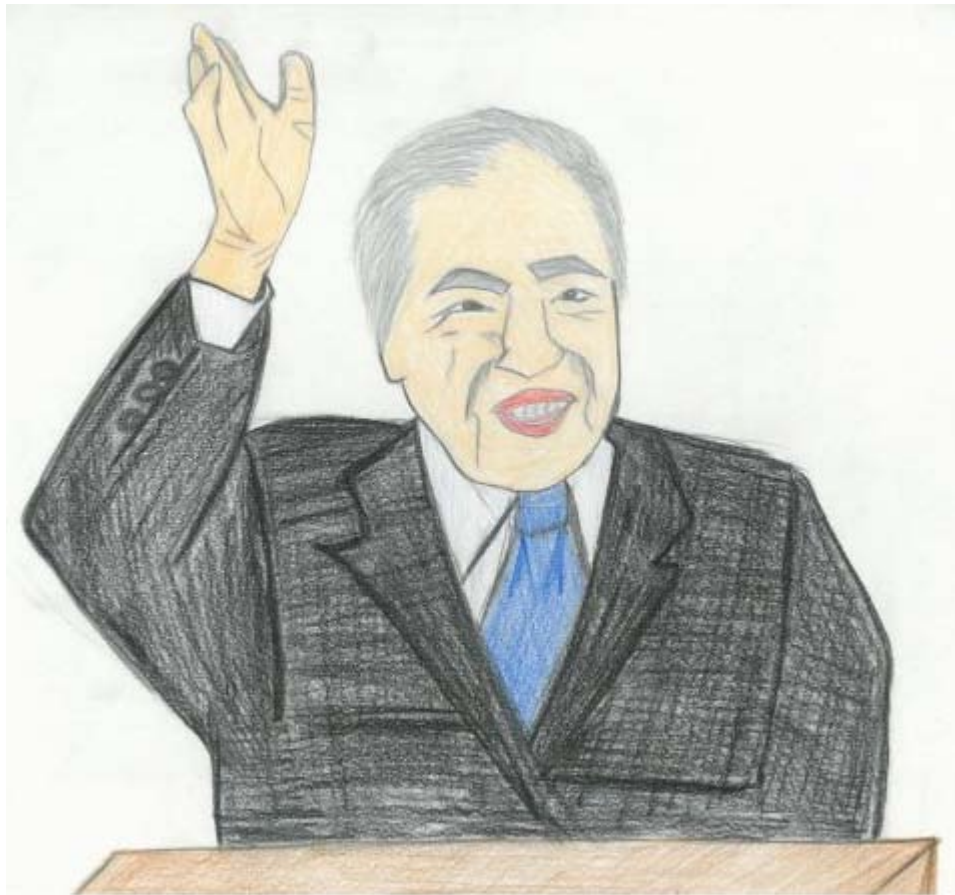
現在もなお、約 11 万人もが、福島原発事故による放射線被害に翻弄されています。また、世界でも、放射線被害に苦しむ人々が見捨てられています。これも「非人道」です。

私は、そんな方々のことも胸に、街頭に立っています。

私たちは今こそ、命の尊さに裏打ちされた「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない」という思想に学び、被爆者の声に、真摯に耳を傾けるべきだと、強く思います。

「ネバーギブアップ！」（広島被団協理事長・坪井直先生の口癖） ご静聴ありがとうございました。

2015 年 8 月 5 日 盈進高等学校 2 年 橋本 瀬奈



「にんげん 坪井直 魂の叫び」

「聞け! ヒバクシャ (被爆者・*Hibakusha*) の声を! / Never Give Up!」. 1

編集：^{まいしや} 盈進中学高等学校ヒューマンライツ部
〒720-8504 広島県福山市千田町千田 487-4
電話：084-955-2333

発刊：2017年9月29日